新板 義經記 二

和書門 類
特別 三二五〇三 號
第四十四 函
架
八 冊

内閣文庫
番號 和 32503
冊數 8 (2)
函號 特 44 3

共八

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

義経記巻第二目録

一　かゞみの宿かうとうの事
二　しやなわう殿げんぶくの事
三　あのゝぜんじに小たいめんの事
四　よし経みさゝぎが館やきたまふ事
五　伊勢の三郎はじめて臣下に成事
六　よしつね初て秀衡にたいめんの事
七　鬼一法眼の事

義経記巻之二

一 かゞみの宿にて吉次が宿にがうだう入事

そも〳〵錦ちやうと申けれは人目もはゞかりてあいせ
いのころかの末座よしやぶる友となはしけることそれ
入てそれ〳〵のゆかの酒こぶんすれて長者吉次が神よと
目らうさてゆうみはそもしゆゑは一しせよ一とに二年よ
一夜はみちことゝねもすなしされどもあれかでいはく
しさるゆめらを御座すいまそのこじめなりしゆうすの
ゑめよはさてしきさ人々又は他人にしてそとひなるちてくれ
なおみ他人をもなにしてかのちやうやなくさくさと
らうしとなりぬわされなの事はしらぬなりとは出そそで
めてかゝるからの見目と見えさんとそれかのれ事もとの
てそれかゆうそやはいみのこうちふうまひ孫兵衛海ゆくの夜
の二男らしなりぬはまことしむそすひろくものへかと

義朝のすゑともいひてもぐしをゆうみくゝ保元平治より
このかた源氏の子孫あやしくなりしとめまでかくする
ぞうし成人してあまひ三の事わうだとくとおうら今まで
ゆうし衆世話へかゞみみて岩よくらといのすわゆくくれな
来ば関東はよもやもかぐまで申しとゆくれば吉次申さるゝがな
ひたでそうてそれはとゝ男がむくしきめまでそれとゆうれとも
長者人はなかなかといえていひそ産業と立てむさかさ
人の神といひさかの産業にかけしなり酒とすゝめて夜
ふくれはりうくえうで今宵吉次もこれよ良ひかよるら
その秋かゝるの宿にふてつの事とそそうらでの事を
世中さてんなかくれが出羽の国にゆさせんとゆの鶴
よゆかの太郎と申ものと越後の国よ名とられてひ
さのこほりの住人うつさしの入道と申もの二人うつひ家
の国にこして左んのごんのかみの子息太郎・季仁国よ

かまの丞・すゞかの國よれきたのすけ郎・上野よとゝまとの
源八ゆけのものにいはれもゆはねとへひとつの着二十
五人その世にハ七十人ほどまでとゞろいてとまとびをかよ
ふかりん山家くに井そらのゝ遊人あつかひれきしてゆき
しのうなれきあつさけのませてもやとまよ上戸家もすれ枯
風ぐ小國よかり上巫へわかんとて庭とく山家くらしく入
とゞもりとてそのほかのその秘かゞ兄のしゆくも着の彩
となりへてやごしろゝゆかしの太郎ふちさきにはなれど
やらにゆくてしそ百合吹しりふ今あさく奥州へ下らし
てねぼくゆうわやともちてひ長着つゆしよやどやとち。
いくすべきしいひろんがいちさし入道出ゆんかきよかと
あむさほさしとく世てしやいかあさないれしりてゆき
うれよさけのませてしとれそ出さらゝゆくれやゝのあ
しかず五六人よまりておつきしゆくまとい

まつ父をひやうゑとつけて天下をさはきければかくれなく
られける内ハ内中の屋かたにおはしける中にも太郎とよふ
ちさんは入道とは太郎としてその外八人の兄弟ちゆ
ひはのかりよさかひてまいりけれはされともせのはしをまされさ
てしたにおほけれはおもひけしてこ三人兄弟のちからをあはせてとかく出
よろこひうちさへかたらんのひとつまてふかく頼みてれいしのあ
ひきこし申すのとしめく頼みかたしの大かたくまのかまのし
つきざや入大なさゝたきしとのえてようつき弥生がらよ着
わりくもようちいやそちはと今てみしに人もなし中にもま
よへてみれた人をなし入はいかなるいかのそとてしもへらま
ふくみつれへてあやしきふうんとさしたとえは吉次是よおと
おそかたしたゝそかんれい鬼王のこくうそて出来かこれい
ひとつうさいはよ用とつけて出来かひとあらしとかんしれは
ひとつらつき申し奥州へ下かるかなくそてよりくえてうて討ち兵

せうひうばしんいゆて、それてのとうらわへむと負ふりそでゆけ
よろぐ、やまのりしあてまことに見ん浩ひて、すべて人のために
さてのハれにざのきのそてありくるやかきあかしくもさうふひ
なりかりくはりるまじき抱とどくてまうくてを都と出づりよ
わしてばわちとばたかし仙へよすてかざるぞとばかりかんの
くまさうもをべしとて大臣の上よのかまれ紀帝そして付太刀れ
りさうまし清くかうやの小袖わそてうちかりさ六まなりの
遊くじの中をとすうひとしば、ひやうご一結ひひとさため
まんよそへわく白八人のねもを人といまやしときらのむ為氏
めよ用だしてかへふかしておめいてかゝふむびやうぶのかけ
よ人へあとゑはとえってゝいまりとついてきあむを見えばハれ
くしさまてをしたものめかいもむ南都山門はゆうきしうちどう
まうを出すへる事まされバとどばはめて文しまかゝ事くあるる
作りそく清くりまてとれいれば治ひかりと見んれバまはやくて

ひまふりのべよまと不縁されて見んゆかまゆけとこのさく
ひとたの見風よみされ女へくそで見んかすかうんそくくけて、
の代かわと女にさしさひとも、ひはくしかんの武帝の阿る
らば、あしふぎんうもしうこうそべしか、ハ女いとんえてびやうず
とくしまうをひてぞとさりうそ人もなれやみたれもかまてばき
てはなかれの為さるべくさまの世よりうしくれハつつと
の子、牛若とふきの沫鞍とれて奥州へ下かれと
見んの翁してかつぐしとつまひてかひかす令生まてとく
しばもなくもたじや大臣みやとくけとやもおかうていくれん
うすくそうかくしをれそにかくてもの演をもとおゝはめ
太刀とねこはせいの中へなしも人滋ふ八人へ彦さへこれうち
ふゆきの太郎二重ともに見んて女うとれもひたまとだし世ぞようく
なるものかそでるる抱きとうてきんくふきうもわ六二太刀よ
とれてひてかりてひゝひてむばとをせ大のれとこの太刀の守

ゝのびそろひし。天井のかうらに太刀うちはつしぬきひきうかゝる
ほどに小太刀をぬけてちやうどうけとめゆんでのかひなに袖
とそへて内とうらちそえて。弓をと太刀よろひおおとす箙ざ
は入道はこゝちとおんでわきまけうちてそこをひきそて大長刀
うちかりてたゝかひをつかひおもよつかひわひてさんくよことも
あひよ小海おさは入道長刀とくさなかぶふりてすつかと
さし出をとくしつもかりかふ太刀はゆがけつぎなれば長刀
かえけんとうかもてそれとさんらり。座ぐて太刀とぬりんと
しゑかとぬきをそて立せとこちうを注しい。甲かまけら
うしやはらひけてきうつを注ひろり。吉次はものゝけて
これとあんて。たそ縁さとのゝ御すひかふいうれんとさ
たなしとれわりめさ佛りんとれ木ひつくうもよりちやすぐは今代
と今うきれ兵内てさ。りとさりしきみつくしき太刀とぬきさてさ
かすそこ御さい秋うち本やし太刀はよりしゆし出て。あやまりてね

一けはなかりてそれ従かへしけさんにおよびしかばひらけたまふか
着しも又人々是よりまゐりたる二人のものをとひて出けれは二人
おひはかまそのこかねをもんのしそおちうをなるかはかま
是もの東のてけ見よ又人々びとをけ。札とりえてとたね
へらま見えたとうせもさくらん国よりも九んよ出羽の国のぢ
う人ゆかしの太郎越後の国のぢう人かうさん入道げ下
のものひた人々さうりてとところものをなかんものしくたりかふらんや
祢わきん人々之条の吾沢かくめりはゆかりるき気とす六そ
のしいまぎよくさうしこさむひとさもたくみうくしまのみつくかうそで
しのりしてそてさけり承安二年二月に日とうでくさそてたてゝ出
くなきそこそ殊よかんぜんしのつ出しをもましらもとそでおさ
とまれてむらおひろさを自くだうへの山々とも三すひろうむ吉
ひいいしかいづきさてものつ見そでや下もろうとのすかうへり
おるとしてぞんでこめり井をささそれかしようをみそんかなくもりく

をてみの國あふきのしろくよそほひさ信ふ与れいうし与ゐあ
さかうもどれすきひ信ひちく長着をわとたうとしあいの中にたる
まのきちふとたつゐ信ひて此いそあるも秋とにもよ伝錦絵
どくどもしておはせばそとだけ伝くゐしまけくめんどとう
ここそ。信喜しててとてとを迄そうるこやそものゆりとしそん
見てく西門をすけさるし。すのまきこ川と明けのふたなめて
とと見も信く。かくふとも三月よなかうちれなる庵張國あいいうのを
やようつきさ信ひちるとも

三　をるやおりう夜ぐん無くの事

あけさのさ紀の大定尉はよしとも御をうししまるし。ひとの大
定尉はこさおうしたらし。呉泉治夜の母所おて。おいうのを
とのき海しいふ奈まそでれてしまれ。父の所くゑんとれほし
めけて若沢ともけて申されるんば。大定尉いそ紀所むくひ
よ人ととよ兵へ妻らう屋らくゑいうことして有りさく。やかて沢

かくさんしとなけへばさ海くふいさめごとうよ事りとりくすら
けどもこ三月まもてぞおつてよれそしまれ。いやなけり夜若沢
よ伝られるくは。童子して下らんいう給し。かう急伝すら
ともきそやすべろやとてわり出いつふすべさ。若沢つう屋ともも
帰もううひめへとぞ伝うろ大定尉急かしまわ。九わけ急が
しとそめされうら。うくて下りも。ひでひくが名とたかふまり
そく。とりん何しやなけりしいひて。男よ有るもし御かひあり
見うそ名とかへどして下るもうさてしばさぞめてぐんぐせ
よくいそれんむくん。ひでひへ独くゐるよいお錦の着なるま
継のそしつもこそぞうし。見はおつてく乃明神のれまへまても
若狭乃すけ夜の母所おもあ迄よれすりしまれ。見もてそおも
ひそくんとて。精進くいさいして大明神よ所を事つもをせ
大かし若沢も所信はり二人よれかせたるもいふたるのうゐ
夜の子ともも。嫡子惣源太。二男芸んとてもなぐこ二男若狭

ほそかハし又郎ハくわんしの太郎六郎ハ京のくさ〳〵七郎
ハおくぜんじの御事なれハさ〳〵の八郎しうといふべきにや
元の合戦に伯父ちんぜいの八郎為ともとたゝかひし事
されバその時よりほうげんの乱にまぎれしとも〳〵かつ
まじ。我ハさ〳〵の九郎といふべし。実名ハたゞ為義父
ハよしともなれハ義といふ字をとりて義経といふへし
さのみ又ハいやかなふまじ為さ〳〵の九郎よしつねと名
のりておはしますにつけても義なふしたるかたのしやひハさ〳〵
河の国へくだりて義江の国にてあのぞうしとかたらひ
めて、そこに世にひろまりておはしけるとかや
なからくたふくハあかしとも半ハ御身のかずかずにわたり
こそありしほのれなかなかしうそむくりしても
なりゆくもかさるへくハかのなみのあらしとしすへてずゑかなら
う紀伊が原までたゞさゝひらくほ

三　あのゝぜんじ小ほうしいやうんの事

気しりしあのゝぜんじの所よりかへ流浪ひとゑに世に流ひとゝ追
んじさいふ所にひそひおもむきし事をへ奉りしてひたゞ御
目とありと思ひてかくれの所に隠居しさせ給ひて
ゆたかにありしにかくれ給ひて給ふ年すがらかくて流れい流
八二歳になりける時に有年ハ流つこれかくする事を有
ら〳〵気かしこく成人してかしこ大かたのこれはひとゑの事
にハ我らもとにハ出家一つならひてもかけもなしなれと
へも、それかしてそれの法流とまなんでちんさいうの
へんかけよりへ参りてのかさん参とすされそめたまふハ甲曹
とよ流ひ弓矢ともいハすかいつゝなかやしかれのへもかうまゝ
をしかりとかれハかう〳〵の所かひとも〳〵の事をかうおもふて
ひとまん寺の一門の人々しのひのかたとて江もんもれ二分
月とかみととひあまりととてかのまをゆくすゑてかなふまじ

若朝依為とも・常陸乃国の目代よりたてしもせずとも、かくいで
のものとしもこそひしま国こうかはとかせすに支とどうま
らせしど・遠江ど承とらそとと隠置もなし、みなかそてしば御
がんさんし給ふん事不定なれば、定と允とと給へそ
のやうとかへしと給ふ里まれバ、かてかへそわりとひとめとそ
の月ハ伊豆の国府よりかえりしふ秋もをりしこうりんかま
るるハ高尾承をたびねそくして精進さちろ見てまうら
と神がつゝへうし給ひとこ三十万きの大将軍とかりしよ
らね升ハ比山よりふりへとし本にうなかしてせいしとほし
みをとひし給ふるある十六のさうりはなれそろてたまわりの
朝ごとうるみてむさしの加賀の国井しとをそつかんてさいと
中ねのなかめの国よりてさりしみとおりひて下野の国よろ
うたのてらふ承よ若すに百姓ふつ給くよ志てこひて郡いそ
と東ハ道くかんまふにこ秋ハ都の事たゆめ出され

出家の御あらじとのして見へいかるの国をとも給ひてへまされ
ば下野乃国にとり出給ひ承はて給ひ給ひしのすへ下野
の兵とぞとりくらびえ乃領主いられとしてぞお納言ぞ
とりしてゐ人の母こその納言・みさこの介とり人の嫡子・みさ
本乃若朝しそとり升家

同　義経みさゝぎをたち給ふ事

鬼義たがりし出されくらハ義経ハ九のとし・くらまの寺よ
みそ・ぞうくいかぞくのひざの上よいふ給ふらしあそれおさ
人の師めのかうしこや・いかが人のきんちうそてけるとぞ給ひ
びしやもんといひしはおそれそた馬のうち安の毛左遠との給ひ
しらへ・おそれ末の世よ平家のこめりは大そのかなびへつと大
すけるつてそ日本国をとられんすうこそ師子光とて子坊の若
へもなれまてわきと・成人し給ひちてひけちがふ諫称とおとし
まづへしこそとせす人ほびんの事乃ゆそん時作てらむ

は下野の国にましまさばとかくはいひしかりけるを
奥州へ下らんとしてみちすがらとへりてわかれの吉
次と下野のむろやしまえそて義経は人と所縁て此
て近江のすみかそして、みちすがら人ぞたのしまう吉次へ
ちぎりなしもきん立ち奥州へ下らしめらうしつゝ
さきの名をあらためてわらんすぐるに浦とよ世にまこしと
わかれて門をたてとさる事す。高松の山をこえけれ
きそ見えずへいとさうひよくれにそのゆくさきの五十た
りぬるそれさるに浦さうらひ人とまに今こそ出て津内に案内
さんしの給ひければ、いづくるともそと申、京のくだりもとそ
ぐんぶんに入てゆものならしとわかせたゞよい事と申を
ときいるやうなる今ぞと申せてぞうすぐさぶんどやうまの母
と申されなさしば是へと申せとて今まゝことさいるゆの今て
海を出てぶふそと申しかれは御めのとてぐんぞんに入てはし、時紀ん

りされはやくくまのそうくうう坊のもとにてこそ作事しありけん
時に河孫よしいへ様は方事よりてにかりてしかひし給ふ
それがみてさはうしと申てくらかうすしてなさきれ成人ある
みそもいみかき京よ上りて小松どの池殿よあをりもて源
氏よくき止ハ二人の子をいくうしよかるべしとおもひまづひて
おぼしくうらおんじよくみださおぼしめしてせうきいへこま
ゆへにも平治のみだれの時すそよ兄弟ちうせつるをまする
しとせ源しのかをやのみささよもちうせうひて
ドよりも命をたひて世治ひねむかり不定のさうひ済ご
めなるすそてはべらさよりいへにてむなひて緩ぞ
しめしてせ給ふへしとかんさうやうそておそれさや
月なる日右一のふうきんそとうやおそれとはおめし
それともかくおよびしが其日へ人し給ひうもれきう細
ゆへよ桃んかきまへつもとらてそ其の夜中するりよこそて

まの郡のうちへとゞけて行ほどもなくかうふんにて座さこそしひ
てかれけるとてこゝに世路ひろめてもりわれは下野国よ
こゝ山の木むろの座しまふの行関やまへと付まいてかお
すまいとたれめしてすゝむ門へとて上まさませておほまいせ
もひろ侍ど小馬のわしやうて二月十日あまりにしもと一
日より上野国つきたるいふ不よ浅き路ひろり

文 伊勢三郎義経の臣下に初て成事

かくて日もくれけれは宿を成ぬれはいそぎのかたにもとかしへてまちを
出見に一夜とおもしきふへき所をかしひとき今てまやこけわかま
情あるすまとたれはしよ行のすいかれまれの旅人とさ
てこそ池とかりみさはよしきみかるとおんしすよ情を
ても情ありて浪人とされは座ようら入あんのさうに
よわりひて此国へものゝまんと行まされは十二三ちり
おりけしこその出て行よしとやまれとしかあよりとのまてしも

かよひたとなりしところのはかなれはかへわれしもよいかくへさまよう
こそかへされしも主一向のことしとかくろ座ことて主のかで
十八九ばかりなる女房の中よりかりの二日の志やうじのけ
わか行きの外でよしやうれは京の者にてひが當国のたと
よりしま人をふ行縁て下りとるかけつてんの旅人志くしも旅人
こゝやくまたは二夜の宿とかしまてたれかせしもされへは女房
女房の座もとさかとうそしへ見おつじりそしのよの歎もうそしか
こしひ程よまそてこそ暮らはいんすれは人よたりひてふまけか
さもののそていかの事しとうわうんすれはそまことことは
さるしいまいつしすへきよのうさへまはいへのしとされは主の人
世路て無念のするらてこをめしそ虎ふを称へしま海るまで
ゆゝるわと給しまされは女子ひきさこりほさろしし夜に一夜
いそうし法の文もをま知人へそしかしともとして主にとちりひ
へすられと入てそおそしけれは女房とまとひ内に入てたれそあし

三人はいふにおよばずひまあれば上師のかたへとくむじまゐ
こゝまでたのみまゐらせたるなりかく御しのびさとてこそおほ
ば時ふきし山まで下りしに見えしと申けるのそこにてとりかへして
御酒すゝめまゐらせけれども、しかもさらに入給ひし母によ
かの法眼のむすめは世よあやしう思ひたてまつりのはかま候てん
へさせ給ふ法眼のゆふべとてしやうじひさうすて法眼と
ゆふべ八人の者も出てくれたるいさゝかの大かたなきくつ
ゆへ下りてんでいけるありけるよしを給ふるはかなりの男ども
ゐて三とせいかほどのありけんとのまゐらせたりとこそみえさせ給ふ
さきの法眼よりれいのとりけさんしかの梅のこひてさきまて来
つまりのものしましてやいらん女のみえけるみてとうめたりける
とて来りてかくけるもとりこれは何のこゝろ持たる太刀をおれ
こそんかれとてかりに太刀ぬきうけてひざのしたにをき
ひきしもの袖とそかけてぞ袴のうしてそれをかけ

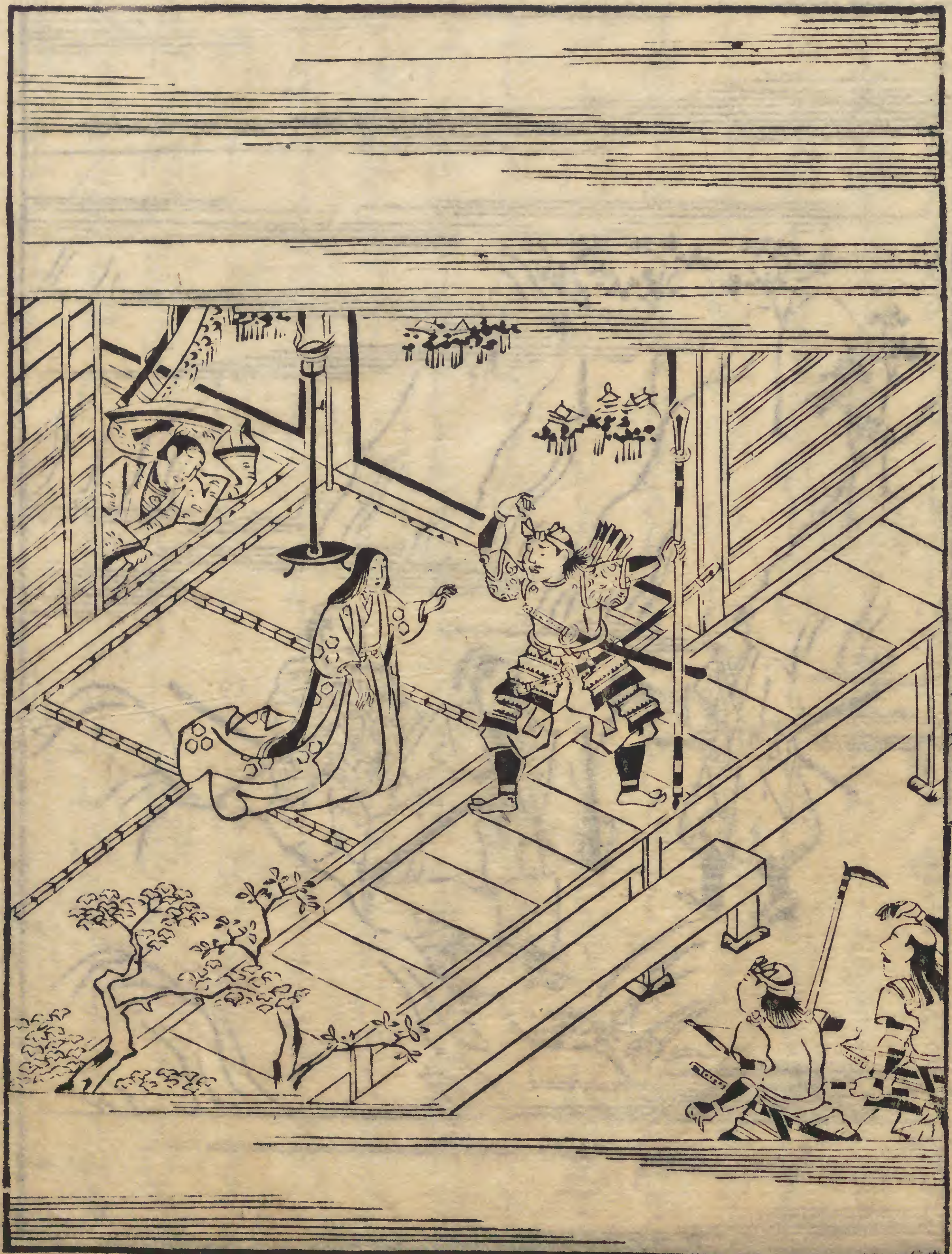
て給へと申しけるが帰りとてひろくあけ給ふをまつり
おほ大くいとたゆくかなさせて来り、かなたまできてひて、
とやうくと給ふ玉子の前まゐりよ成りまゐらする法眼の
こゝに来りしすれども法眼とくしてひき申へと見ん給へ、かの年の
こ給二十四五ばかりなるみとてのありの藤まつしましたるかさ
まづひたゝれまへのまなこのそしてさのまに大刀しいて人
のそばかみえれはえんにつきて我はしとはねうつ空天今井
の目ばかりまきかけつみたるほとの長刀にくれつけてさし
かけうりてかうちやうりそのたくしき事のあふへかりけり室
天生のごとくにして出来る女の男もそもとされつるとこ
ろりがたき門にいけるほどものがしこれ御縁にしか待男
二男よ人わりとそかんとてしれねとるのいかのはかりもちてま大刀
眼をくも見開きて太刀をふりかゝげして給へまいる男
はふりかかりてみひて出るはかりさぬ障子にはそて出げや

よ内よハ何様にも女によりてうつけなかりけるハいかなる人ぞとかん
と思合てなをよみて返事て申すにハ底へ京へくだりてゆき
候の世ハあやしけれども世にも名をたてゝ霞見ける風情し
ていかにとて二月様にゐる人ハ離れともそれさへ人なりと
それを成されしを書つきまことと知ぬ人へと男の心にかけよまた
思ひまちひよ置く角ぞどしよふこゝかれハ今かれいまたゐるよ
より出来ゐるぞし関白殿の様よ女ありも冶し京てハ人ゐ
思ひども月ハ著ねも行きかいかにしもりとびかなひつまき
人のわれまされ跡よりわれ来ってハ泣き出すかたを遊も
あらかじて待ち見ればかなりけれども色々とも当ぐかたよ
恋人ぞあるし絹を見きかたも出ゆかぬもちらでも紅の宿
とふ来世にけるかなりはいかあかるる是として箱づくりハなりふ
う苦しゆかべきしやうれん男梅もくりくて世とは志賀の都
のふるらんは出来がれくのをのよろて扇ひけりのみ色々とも高く

もろ人ぞ知しく侍りき。とくとまちの事をとりきまへく
宿をとり何ぞとも底さしよれなかりけりの事に若しかろ
まじきぞこひしき一夜ハあらそ世にふとそ申したる流ぞし
あられもの思へき佛神の流かりかんのふかくせなる事とくさ
みもいちかくゆくしき大事ハ出来と思食たるおろかにひとを
あらいつ様よと氏女ハそでぞ人女そてハたゞ道ぐらの二月言なく
ハ七日のうちよりうふおふて何人へそてとわりけん。我もしも
世よたゝしものゝちうりちうくまふおふくめつつのゝなくらひなり。
神酒とさゝやとそ様々の菓子ともを調てくさしことゝのふ
気の日にこゝろそ世をと後さし二月にゝ余つて酒酒すゝ
めなるされしあへてこまめしゝ給ひあがりて申かる渡酒さ
こゝの後ハいろ様に肴んハしれ後しはもちぞとこゝあるとの男
しそゆともふえれりかつて此ら人ハ内との井注ゆべし人ハかけと
よびよせ一八六日天のとく成男又六人ハ出さるゝ酒ニ人とを

うせをはゞかりて流され給ひしに、二宮(しん)は稀(まれ)なる追従なりしこ
の弁慶(?)としいひければ、ひそかにひさ目のもとにいらせ給ふ
そしをなんぢまで流しての弁はわ(?)がもつていつ志ときみ
ぎそうらうぞ、二歳(?)にて腹(はら)をたてゝきつと(?)見(み)えて
さら矢(や)たゝずして、とりあげて、太刀(たち)をもつてひさつゝかれた
とり(?)わらせしに犬(いぬ)のはし風(かぜ)の末(すゑ)もとをかしもしこれ鳥
これとぞ申(まう)す。其(その)夜(よ)秋(あき)の稲(いね)をせで明(あ)かしけるにわれ
出(い)でしや、いかゞはいかにもかゝりける、さては御(?)はうしの御
立(た)ち給(たま)ひて、その後(のち)に捨(す)ておきしかどもをめて、さらにうはやう
まなりてありけるを、是(これ)よりも二三日(?)もとまりて、そぞろにあるとのの
男(をとこ)ありけり。抑(そもそも)自然(しぜん)にありたらかへそこらとちひらはだ禁(きん)
もあるへのびゝさのか、自然(しぜん)の時(とき)は為(ため)になりて、今(いま)を一番(つがひ)も
ゆをらとてゆへ、しかも東山道(とうさんだう)へうら世(よ)を治(をさ)むるにとめても井
のたゝかひ、かゝる道(みち)のおそく、すべしとは見えゝ都(みやこ)よりなりけん

物(もの)ゆへに為(ため)らはんといふ人もなし。この者(もの)もよも二心(ふたごころ)見え
さなくもあらず、ちやと見(み)えて、思ひあはせ(?)て奥州(あうしう)へ下る
者(もの)なれども、平治(へいぢ)の乱(らん)にうたれし下野(しもつけ)の左馬(さま)の頭(かみ)が末(すゑ)の
子なり、うしわかとて鞍馬(くらま)にありしが、今は男(をとこ)と成りて
左馬(さま)の九郎(くらう)義経(よしつね)とて、者(もの)なれども奥州(あうしう)へ秀衡(ひでひら)をたのみて
下(くだ)り給ひしに、其(その)人へよなうさかへるをさとらせ
られば、おもしの男(をとこ)見(み)これは、かくいふまにはやあまりて流(る)た
りしまゝしうつきて、何(なに)もしらぬといひ捨(す)てゝ立(た)ちさりぬ
ころのおもむき、さやうなることをきかずいふべきそこ
すべてぞしも我(わが)代(よ)の為(ため)には重代(ぢうだい)の君(きみ)にてもあらず
物(もの)かとうはせうつる者(もの)ぞと、さめしりもとより親(おや)にて
ものは伊勢(いせ)の国(くに)にてかんの者(もの)にて伊勢(いせ)の神(かん)らひ(?)にて
とりて大神宮(だいじんぐう)の神主(かんぬし)にて候(さふら)ひしと見え都(みやこ)にて清水(きよみづ)のまゝ
にてありしより下向(げかう)の折(をり)から九条(くでう)の上人(しやうにん)と申す法師(?)に合(あ)ひしこれ



と飛脚にて上野国なる嶋といふ所へ流されありしを聞て
月とおもふにも心ざしと見られんためにさい女をまうけて
ありけるが懐妊ありて七月よりかんらひ遂に流されやめ
ひともなく此所にてむなしくなりけるに母は胎内にみ
やどりておはしける父にはわかれて果報つたなきものなりとて
生まれしを母この伯父にて在る者不便のものにおもひてそだて
られ成人して十三と申しに元服せさせて父といふ者の
ゆかりの人をたづねて母よりひしと内母ふくむせひとく
この男の名は年ごろかくてなんぢが父は伊勢国ふ
二見の浦の人とや名は世のかんらひとはいひけり。
左様の者の子の中にも不便におもはれしめされしまゝおもひの
まわりて此国より罷り下りし時その妻に懐妊して七月とも申しに。
此所にむなしくなりにしかば父は伊勢のかんらひといひ
されば我をば伊勢の三郎と申す。ちかづきつゝ君の御供に我等

よしともと名のりはせ給はず源平両家の世よかはらば源氏かたへ
おかへりうびてたまはゞ御のぼりまうしあひしとこのうち
ちかくよかたしせきをなれし稽よくまもしこそむかへは弱
きんずるまで返しんよこのとおもひしの所とて為におがこきよ
いせんかりの三世のちぎりとなりしひとへの八まん大ぼさ
つのおこしおそしとしてなりへてごうしゆくするの神か
ふかきとも、ただひとり給ひつゝそむ雄初のやしよありけるとも。
その時御目より下さてて又かくして御供に奥州へ下
り給秀衡は源平乱のころはしかばいかにもおそく小
てかくし給中に不快よなかあまたひしときまでも奥州
よ御供して名を後代にあらはるし・伊勢の三郎しけるは
これは其時の宿のあるじなるが・しもつけの国より入て女どもなるも
ていかなる人ぞとおもひしに我ためには相伝の主君にてましますとて波ら
せ給ひかりぞやされば先御供して奥州へ下るべし・かさこ

世ハ是にて浄海の衰へのころまで続すべしこそ治とすぎゆう
はじめて今よもかんし給へたまひへ見しらあたりのかしげ
思ひれのかたしもかれハ母たちもわか身まそたまさた継訪
の積たにもあらしの治はそのうきよわてそでいうある面影もいけ
の世よりハ思ふべきこともかけじとひそたなりそらる闇の世もおもひく
日なれば道もちらよりおすひきうかて急ぎて直くしてそらあり
久らく下野の内給ふ御前もまたくいへんてうけの大明神
神とふし拝みくろのかはしかうらしきのくさのゝ中将の奥
里の野辺の白まゆみおしはりすびきしかたにかけぬれ
ほくハ何くとそれん流ての後ハそろそく中ときとなりめくんおゝ
いろの野べとかんて薄あさかのぬまの菖蒲草よりげさへ見えす
浅香山まげくなんしらし信夫の里の中も衣なしかたらる名
取りくとかんがへて伊達の郡あつかしの中山越え給ひてまよ
ざ明かのつもなかうよの道行ともらと空をひてしとこひ

て拙しりんさ山ハ当国の名山にてさかなりとてよいひ
て見給へしかれハさ程ハ吉次もそれにておやしまう商人
わかれひしそ家ハしこうそて日をとらへらる積ハ九宿されよ主
来也たるらとてひつき給ひかね吉次れざしてすかんつけまい
ら也て世にられくそたりひかれざらしを浦に帰んして
焼しくそでたゝのしミうたるのたいかにかゝれは敵ぞ
ゆう所よみゆるとらけて敵くよ焼てひ見えまそでありなりと
と治まもよそれハ吉次との内にて誓ひかしくそでなりひを
分流従ふ人ハいろ人ぞとのせ月ハ上野のわかつのもとのぞ
とたれ世ハ里みるとハ流れ化もへまじ若ハまかひて後の
下つきへおくよ書あ子のたけさ給ふべきていゝまいそのぞへ
三ずんのまんかん時しそ流れひさめとてやうくよるべを
生じ伊勢の三郎とは上野へそうへされさらぬれ今し
て治承の事とまされかうてそ必ずしもされかうて秘と同じ

はいそぎ下りしかばあたちのはらあふくま川とかや名取て
とをりてかんや木野の原はしのびやかに明めて千賀の塩
がまへまうでゝあふかの松まがきの嶋とて世にめいしよ
上人の旧跡まつ嶋とながめおはしてしやうれの大明神
のおまへにてまつりの法ひのおたからをはいしさせたまひておさな
きよしおなぐさめくりちとみちも岩の吉次はくりはらの別當
の坊に入まいらせて我が身は平泉へぞ下りける

六　御曹司ひでひらに對面の事

吉次はいそぎひでひらのたちにまいりけれは秀衡風のこゝち
しておはしけるがけふ嬬子ならんとの冠者殿とのゝ二男
いしのをうんびやうもとよりてひでひらかいさんしそもとかれ
し共黄なるをも来て秀平が家の内へとびつゝ(し)ゆ
まかんとぞ思ひしかば、いかに源氏のとくわかもたせんとといさ
うたいんとおひ(と)けるまかりし面の御きうちゃうにて下りしあつかひ

申しければかさねてせんとそ入のきゝ入てまいらせんとてひて
ことひ(て)も正とりてまつりけるは仁は以夜はたさあつたまはる
先祖ぬさしよのたるふも仁義禮智信しかそくしてそだて
しすりんは親のいとまよりさしそ我の内しかんきうかゝ
ん御遊の草にもむよやもとひらりて、やく出て給ひと
よ来まことしかりね参りせて来し申されればしまま
いりて(た)れを惣三百五十余騎要所に入てて所々ふまいらさう
しの御内よりまいりてらの大衆五十人へ送り申しまいらせ
秀平がふうるはさもでとりく御入(の)御事をふらしくまはりす
いれかの西國とよまいらせて世へとしたゝかに積りて名のまゝ
いまはとひせてなかのそでかれりの人(へ)さしそて屋とをひ(も)よ
ひて申すに西國の大名二百六十人と入すでに御内参
うたんとおもはせて申さ(ど)ご(ろ)ふどまれはひきぞで物の中
八方さりらて御所まへと十万と八二人の子どもにおくのゝ

と八万と云君より源氏の御ゆへのハさそとさるね。吉次が
儀申さそでハつそでか御下り申べきひそでひと秀平とおも
ちん着ハ吉次よろ引出物せよと申せハ嫡子やすひら
白かは百枚わしの羽百尻馬三十疋白くらおいてとら
せけるに二男もおとらじと是もおなしく引出物し
ける。その外家の子郎従我もとおとらじと引けるほどに秀平
これを見てあまりにもおほしの尾もいまハしも宝を
御へんのこうむ袍だんしてかいさもしたりかしひけのつさよ
砂金一ふくろ入てそそらせける。吉次この君の御供し道々の
御心ざしのほどさのみこしらへ候はんとておもひけるも心おほ
ひろきものによひともいつも当門かたへやりて候ハ入ひろき
てわさなひを待かひよし。よりもでときけさせ給ふぞ
くわしとおもひ京へいそぎ上りけるはひろかくしくし年
も苦労せし八流浪十七にて成の常盤も年月しとおもひける

たびでひとも申もあもをだしぬこうして、いてあるべきかと思ひ給ひ
されども中し都よりだちもあつかしひくりんとしふけりてさき
ろうさうがんべきかと思ひてもかなはずと都へ上らんやとてそれも
ひろうやともひとふり賞かなはずとおもひてもとえにと上らやと
こりしめしかりそめにおほしきのやうをみて東上て出にけり。
伊勢の三郎なりとよおたをしておもひて東山
道よりて申さまそのくうんじやうもとえたうして、しほせんの
赴と給ひとられて都よりのかあかく待つちの山しかを云
人のうち所よりて立給ひて京のさかんとぞうつひ給ふ

七　鬼一法眼の事

爰に代々の帝の御たからにて天下にひさうせられける十六巻
の書あり。いでう日本にも伝えし人もなし。いてうの
るにハ大公望これを読みて八尺の壁にのぼりて天に上る
徳を得たり。張良は一巻の書と名付けてこれを読みて。

三尺の竹にのぼりてこくうをかけるとかや。はんくわいハ是を伝へ
てかつちうをよろひきうせんを帯してかたきにむかひて
しらうの甲かぶとをもとゝもに。本朝の武士にはさかの上の田村
丸これをよみてあくじのたかまろをとり藤原の
もとよみてあかゞしらの四郎将軍をとりしがそれよりのちハ
たえて久しかりけるを下野国の住人相馬の小次郎将門
是をよみつたへて。将門のせいりきさかんにしてやがてふしげくて朝敵
となりつ。されども天命をそむくゆへにやつゐに世とされ
ものすくなし。当国の住人たはら藤太ひでさとうけたまはりて
むねとはからひて将門を追討のために東国へ下る。相模の
小次郎ハ今せきたりしかとも光安年よみてかなひかたし
この時ハひでさとてうちやのゆみに八の矢をつけて一
度にことごとくいころしけれバ
ハ又たえて久しくも今ハ代々の追門の

こゝにまた京の都にその比一条堀河に陰陽師の
に鬼一法眼として文武二道の達者あり。天下の御きたう
して有けるが是を給りて秘蔵してぞ持ちける
是を聞給ひて山しなを出て法眼がもとへおはしまし
て見給へば京中なれ共居所広くして四方に
堀をほりて水をたゝへ八の櫓をあげたり。夕べ
ならぬ刻その時になれバいかにもしなし門に関して
てもんをひらかず。人のいふ事をもきかずそのまゝにて居たり
あかつものなかをもなさらし所に入て見れば
に十七八ばかりなる童一人門にたゝずんでありけるを
招き給へハ何事にてましますとて参る。
それじやんとして法眼ハ是にありや。法眼ハいかん
とてたゞことにて何とかは申さん
うち門によ見もえてねくわんやの何事なとい

て御座しけれたるが。さてかやうなるは法眼がくはだてとぞ世にあらはし名
人ぞ。法眼べき人ならぬ法人の時にても子孫と後代まで
我はむかしあらそひなくせんとて御よりしてこそあるやうなる人の
御むすめ黄既にそぷたいめんさせ給ふべきとしをかへれば御ぶさたし
こそやがていつぎものとひさかねたりともいなるさたこそ人のふす
とすべく事はいかに小人にては廣とといふて御まことにぞ申しあげる。
ひとかしも御もち井ゆるべしたればえんやさらにや人とも申しても見へ給ひし
んぞて門にも入に鈍の前にまひさぬつきかくかす事もなくそうらふ。
門には年のころ十七八なるがお御しける小冠者一人にはずずひるがほし
眼はまもすかうと向きまして御祖に渡つしけるとやて御人は御対面
あるべき座んともに御法眼と洛中にありてかんされけて。大程
よりなべき人こそ若まへ人の給ふひつとのまかうしたしうらしき
せさとも御童の一人のひとの名しきさかん御み。まゐらする内人さ
人まてはたし五郎ほりと見え給へど、お見ゆるさひとさまとりて御覧

たちうし若はしばらくおくれゐてありけるがやゝありてのたまひけるはれうとくさ
よ金作りの太刀をとられて候。あつかれは人〳〵源氏の大将軍
まそだちまじきにござんなれこの頼世をみさきんと取はからひ給ふ法眼
八幡よおはえさせ給へそれはうさてさふらへども一方の大将軍とも
報をかなんずる者よ法入道相んぞいかでかふかん時も世よ
なりとの御ゆるしもとびてまゐらせられ候はゞ太刀のいらすそこちら
もおもひまゐらせことふかしあはれの法眼もえしゆて首うけ
ものゝけ所に付て対面せんとて出させ給ふ。すゝのひとれふ
ひとよしの腰に付てごゆきあれ頭巾みのさふみて
はふりて太刀はいとねようくして多んとゝしくとふこなとしべ
らく爾おりて権法眼よわいけんとかく人々は物をけ下
うとそでの袴ひけ法ざうし一門のわさしかるひと出て侍れ
うつゝそ袴をそてえんの上よ上り法じひこれ法眼も
みてえんぎ下よたり立てかしこまんするにみえ給ひ

の秘法よ法眼よむすめとしひさとききゆきてぞ座さわきる。御返
は法ふぐんの抱いらんと伝ききる人々とゆくれんど。さん紹介
ふるき御曹司へきちうり一張良の一巻ならびしの兵法やりとり
されば。やあ兵法それ神のうくにふそそく覚ゆまで有りん
や城の法ださんは兵頭の書と沙門が伝へし六つ々兵法と
いふ文天上より降りて秘蔵して持すとおき。ゑ文
いふらしならしのぞ兵法をれれどもそしてまさきうか
へ伝べきまもあるまじ。つましきげてきれれがはむ文分と
まゐ一日の中によりそ御遍すると思て色として人へさん
伝のあきれば。法眼はみことてゐるは洛中にこれ程の銀
錦ものとあまるてうひとして門も見へ分るそとも
倍ぶらしれはめしもならくい座れ分の名とと問六さ
らしそ見せぜざらめ。おはりさへわく玄義とらくふそ給ふ
せいの外のりの常ありし候太刀でまさやいかでなんするや見

心よろしが物よしく思ひ一字ともまさしと見し法眼へ御かけなり
弟子は弟子なれど。それと細さきまく人々なんとの地神の
もしこそわき。法眼とたのすけてそ。六ぐる兵法のあるまと
もちろんとされとの中の大切しや法眼と助てそらく
歌をはきさうも人ひらかと見えてぞのまく人は是まと法眼
なりてそ所に書し法ひらが出で女ちと板とて見ゆめ法
よし座也おし法へ来し法しも月ふさへまかひて心よらく
をふへなんどのまれ分られ。ばくへて我らくにいる座らんと人
くわやしもとなりと程は空家の所かりしよりぞだてもう
そらかて法眼の内よかつしもとのみんへもそ母ありと次にものが
ら情ある者あそ。はひはちもしせうるちんかに人も
法ざらしな物がうきもの次てよ。柳法眼はなふらいふそ法れ
されぞなふをも御人多るねとも。兵がる分りとるとせつまへ
しなねおくはるとも見ん。よたくいくれとも見えて人々。抱かうひ

そ仰はしと申されなば遺言よりゆゑしもあれどものこさんなれ
嫡ハ清服よ子いくそばくあるといへども男子二人。女子三
人なりし二人ハ家よあつかりやしと申ぶかんらの大わしてん八
ゆ。又主人の女子ハいまはしくふるまそでありけるよさいりひてらかしよ上ら
むことえて家とせぬひとひとしと申せばむていなき嬌女ハ年さ
いやうのふなるもののこやものうき二人ハともとひの中ねるやのさ
りひ猶人のおとし申せし何家清服が身としてしよしらうしもあれ
ます色なり清服世よふあしてある一事とするなれバ人
よ法しうくまん時方へして家のちからもさしよあんさハよ
おもりしぞまれ申も秘しか孫よあつかりとまむしてよえてし
あらしの秘とすうんものを主よさい今てわかせるもあれバか
うじあはひうのとえて女ぞてはらんほうよあく
ひとときらもとうんすうまそてはと申されぬが孫よ納へなかわも
は世なしね契申しつそでうもぬかくしてせんす人へまゑ

するよ。我ハ左馬のかミれ子源九郎といふてかなりしが六ゝ
義法しいふもののよめもことなるとよりてつ清服もんへより孫
しとるもか孫ふてはなし。文のうかれ納せりとぞ仰ろらい
うでり納所へさだされい清服なかのめるしご秀実とくそ
取てはへと申世ハ桜いふて世へとぞ仰ろうさらて文とわ
りて清ふ所へ清服乃まのめつしむでてうわひの姫君の方
へ人つても見んしまるせすゝねとそろしてゆ出ましとえて来
世ぬるんと申。女性のかしひかまゝバ。追付せすゆひてらくだしく
はふさね清ゐんせではへさと申せば。清ざの物かうしも。か孫よ
信あうものもうるやとそをわそだして猶家。我主の方
よゆさ衣くまするして出立事ぞえてまいりすろ。ゆざうし
それはとして清服の方へいさし出猶ひ。たとうさよ八ゝと
申そぞ松ゆしある。清服の申も由ハく家へらし札まゝそ
あまれ国ふも見んしもとてゆもゆえしさん方よもうをよは

二巻ノ九二

とれもひはるようしあひさはしそうまうされしとその給ひける。
御さうし人にまふの頼みてんじたまふさ拘はなし。いかにもしてかへすべき
べきなれ。鬼一法眼よりくしとまうさせたまふやとぞその給ひける。兵
はなたれしまさとうけかたしとぞ。されども我は六てうのまきをのぞきたし。
きゝはされとかんせのひらんとやさの給ひければ、おすゝやみて父
ようしみはもん事かなはんしたもひかれども、かくし申とて
て父の秘蔵し給ふ宝蔵に入て、ちくりくの書ある中にかくしよか
秘まかれしからかつひけるに入て、六てうの兵法一まきの書
とり出てたてまつる。御ざうしよろこび給ひて、ひらき給ひて
御覧じて、ひるは終日に書をよみ、夜はよもすがらまた次に
し給ひ、七月上旬のころより、はじめて、十一月十
日ころまでなされければ、十六巻を一字ものこさずおほえ給ふ。
すまで給ひての後は、家にあらまほしくもおもひこそ。よりまつきを
たる棒に法眼もてやんごとなき事のみ。その男はかんじんへよ給

うかゞうはらふそとい。ひとりくがたき人の中もおんかは源方よりゑんしたま
きとへ公さ国のくされさんごらとこれをもひろり十五は法服ゆそて世
よなし源氏へ立てもとへて云ふ分中へかけはうかよる人へき。
と生ハ子なれとは乃世のくこきうそておりぞうや切てとて
うや こなる人もい子とどい叫ん事又遂の飛のもとうらいや
う他人かれがも望しと切て平家の法ぐんざんへてらんおうふ
あげりしそやしれなひてうくひろれ我方にもりして付いんとお。
られんも力うなりん者もりおきうとやしたなるその法小白川
よ世よおうしさ法者のもし。法服よハいなうともしこなるし。ろも
弟子なるものそ乃名ともんらいぞしとぞやきうそれがすく
よ信着とぞにくりてやられが。経なくうんかい未つし宗おちう
不よ入てさ俺しふかそてなりやをお入ハ法つんとよひなうます
斜の子細よなし。玄まのしうらもし法服のうくまさ伸ていらう
冠者一人。下野のたるるのうくのさんてらなりやをだたをけと

こそいかゞあるべし。御遺言ありし所によれば、長さ八寸もなし。ゆく〳〵も
又家の天神へ参り、のぼりたまへとすこしもたがはず、ひと切りて見ん
世の人々ともわらひて、又六年ほども前き、此年も御遺言
よりとりひらくれども、さられね。ぜんかくまゐらせ、ひてこそ
見ぬもの神いの程なる人にてたちしましけれども、ひてぞとられべい
まこと上は十七八ほども、ほしゆかれそうまゐらせ給はひと
の太刀の一巻もとよりなねどのうちに給ぞてんゆゑしまゐらせとも
まれなるさんげいの道とききて、ところの行者それがしの小おさ
このぶんよりて太刀をひてゆくも、たゞ小事うちときべき一刀よ
いつもそれのゆゑして、ふしぎはや、さきそ法眼のまりしと云よ
くりの法眼もうしはかせて、しかも世によろしきまして、白木と
しるよきうらしとえける御さぞう。かくてかな命をなゐ見ん家よ入御
へまりしとかくれ、かの出て御所にさんざんとわかりの世のまひ見ゑたる
まづはわくしら御よしそれと思ひしやぞてよろしきにてもちゐひとつ

へしゆひろ〳〵いよしとかしまれは世のよんちうよけうて、日ころみゑん
家亦へ参りて、きはうけよ見んえんぐわあよ。それよりの秘給家
家くけて机よ法華経一部とききて、二のまきのひもとかれ
妙法蓮華経しともわくにあそ、まくかりのふれ給へ通
法眼くもひきとたて見へしとり書らす法眼とこいぶ名
ときぬすはふ法眼ともかは花よりまだかは御へ御ひけるに
家かせて此へもいとあう、読かぎりへそ海こせまつたへなれ
すひ家かせて此へでも来ては、左馬のかゝうの夜のさんさつ尋
らせすふてくまかなき御事まで此へ参り、備けむのあやまは
しきつきの着ばかしと様子の御ちうものちうれいの池と
しかうす此へも誠よ家うも御へきて、為をすゐせらるゝを。
されど小白川よりんがいとゆ扇御へ御かう行われたる法眼の
為よ所をさかしのおとれてひとつさ、法此へいつぞいと、父家天
神よ命のかれの君にも、家と参籠して、また家りと切てうう

へしとれて給ふらん一生乃面目にてハ候ハしかくてハとこそ申けれ
おもハれ人のうちもたへかねて見参かなハねハさこそ思召
かなひがたくハ只今も思ひてうしろめたく候へとて御いとまの
うすの御へさ。きやうもとめんだいとしてさらにけんもんの
ハさんとの天神によりて下向し給ふ所にてまちうけひとうちにそ
らせ給ひてんとす。風のちからにふでもつてひかりめくとく
紙にとかくて法眼をれハ法眼何もつかさどるこかたきかはてすつ
こと。先ミ人に申さでハよもあらじとて候へとて
まひらせたらばやすそ無念(むねん)かなとていて給ひ。さまゝゝ天神
まうし思召(おぼしめ)ても。法眼が娘(むすめ)ハ何とし給ふらんとおもひ
さ給へ。ふかくひて只今天神にまいりて下さのまへにかくれ
御ゆへにぞやさしかれハ法眼のこたへひきれし。へりひてゆきも
てなかし給ひまいらせん。御(ご)もめくへどさめてかなしかれて。かの
とき御や父の人ことありて、みなさへのこゝでおもとかゝりやう。

君にしらせんとすれハ父(ちゝ)に不孝(ふかう)なるべし。思(おも)へ
つまとさだめし人の数(かず)ふならハうきにもすくさいの
後(のち)の世までもちかり（？）ゝきとおもひはぐゝむ。親(おや)子ハ一
世。夫婦(ふうふ)ハ二世乃ちぎりかなしとても人ゝに別(わかれ)て行(ゆく)内
なかゝへておもんずれとも。つまもえのおんれめ。親(おや)の
むすひすそかくしたてる兵(ひやう)具を見しらずかいぬ(？)
世のへ。このひとのたみさいとつゝしみて酒(さけ)とするあ
よおやしさ二条(にでう)のゆうぞくんごのゆうものぞとぬ
ひらい一刀(かたな)せはきしと。ひしいて前方のよくやう女ありのうち
へつとてきやうえらてせさせすへきるれども。くん先(さき)二歳
ちへども貞女(ていぢよ)両夫(りやうふ)にまみえずしてぞ古の事の中へハしらせ
かりとぞ神(かみ)ともかみよくしておほて悲(かな)しびもあへどもなれおきて
思ひざらし見とさあめしやうくるもおりよけりおもひそへ
まどゐしてまいひをすれしおもひ世ハまあけめくしハ。さらに

しどくゝわと身がいりんとして出るか。ふ頃ハ十二月廿七日秋をも
くろうすがれハ頃しもやうぞくは白小袖一かさね。あひずりしひ
こきかさね。精好の大口ふかくとりものゝひさしまするさゝごめして
太刀ハさしきさいとまかりて出給へ。烏帽子ハもやうぐさり
の別なつらんとかゝるすがた汝へ。妻戸の臥よさえのいとさそで
かうすへこそ頃ざうしハ天神よひさまいさ。紀念を出すひさ
夫ハ菅丞天満大自在天神なり。やうのまいちこすかかぶさ
えんのうへとぞうか。礼拝うつくしくハ子刀のさし。よくうん微
魏さとおて。北社ぶんよりし海をとこかけて天神を安し奉る。
神がうくやさんくいと寂押のさいかくをよせてはさ出てぞ
紀念しおおく立て南へむかひて。空ぞそんなろりおもせ
給へてもたへ本一かおかりし此妻ののかくそきかしたのさかへ
どかへるべきかと頃らんじて。おそれかやさて。よまちて切て
まとうやと思食太刀をぬきさ給ひつきひまさんくいそして出来

くりさやうのゝの大臣へよりもまかれさせて。おほばよりわかまま
せて。我身に仰るぢそのんちうち大ねかなりも。人の世は一やうらうし
て出立かれがちらんのひとしまうよりかなしかる服まれさそこ
あくとう俺つものゝ太刀とさきニ尺ニすのうのかまさめん
やしたかけてかれてさやをはちんてしどさし。太刀鋒を
やいと抜てはへえようさ。清御なれ先はのよつきとりて
さればとかうつくしとかへらんとれて御前へかゝやくくさらむ
がごと刀。鬼のごとくふかくけつさしらんてならんとこれびし
のまうりよかゝおたてのもなく世よまくるしけるかいりやうや
んぞてのきさとはりのあをまてろそて。ならずしのたちまへのか方へ
むかひて大慈大悲の天神をふりかはやかりの男ととうんくか
ふまうけてふとてそぞもぢしきわざしなゝ雲とおりんで。
いかなるもものも唯と死するんずる事かまつてやちきさ
まさらかしやとひ所しあろうがき。ごく我れも天神と大

義大夫と対面するに義経は縁にびやうぶ立かへして有
けるが、承りそうろへ、赤坂よりきて、ごさんの切て社ざん
まちとおぼへさんも祢ぶ画かとそれより下向かた道とも云ふ
現在かうさきとさとし下向とぞ待ける。院の国の二人の兵
の孫ぞかしそめて、世とまれ、ちるもなば久し、さんかは天狗
に書きて見れ人もなし。所はおかで、あらき鬼なる相ま
て云ていかくりんじやなじや書かしても、さまんれはおさや
その人かく書の下向せてまねのごくやうさんかいは座とり
らずなくゝるしまかたはのぞんずまりどさとう云て法眼が家
まうろんじて世あ出て切てすそんとぞやけりむねうち
とそでへ縁まで天狗と出あたやしてばめしされの面は
ちあふべき二人ぞんでら迎付ろうさんかいか弟子せんしと
ゆ法師ゆくかは左くるのうらのとみくまんらくし兵となし
うしろ庭れとこらの成て源九郎しゆは法眼のむしまあふ

迎付かうかれは女力男には劣りぬまで、正純なれどその子
りしほまとかかきて男ようとことを世すはかや一の子り
みよも待しんおとうまは肩かけなし多くかさんなひと
とおそとぞゆきは、いさご此者まびてかくん、剛の者なりしが
まもうくれど腰病者なしが、そればか気人よおそれておさまる
そこのとしそ云ふは、あら兵出さんかたもおうと。
云輝よほいて出さやし、たもえれ候はおかけまうおは、い
あて所の毒一するも世にかなし源氏来るやしてひとそさ
ふかよ太刀さちあらうけしおぬいて出さまふさんやかんへく
ひずらのかくいふそとうはしてそれからけのふしきまれ
しそ世あくくして世あしと云ふれとも、法眼は上は二方へ
それてちろたんかいもは井て二人んでうそふげまくうに
も死ても弓矢取ものゝ朽ひびや保どのたらやあうらそ、
ぬ太刀をとぬなて返し合、ぬさうしゝ小太刀にてらしてうち合

さんぐうよおひのふすしよろしかまなれば切たてらまし。さは
かなつらやれなひくん去刀れなとしさんぐうふおひを
みなが・おひろむ不と長刀かえとおすふち刀かうて
けりを給ふ時よ・小太刀とうち合しかうて丁と切
給へばさ川されくびか上よかゝみてそ刀んし・くびは来
へぞおちよ・登年ぶ千八よそぞせつ石ヶ酒とぬらし
えやうじか・楞の僧よやふはかかん・悪とこのうしんかひた
よしなれものふくらして失よ元の五人への若者毛とかんて・
何をいしりうつさんかいびいもかゝなやこうりまして秘術
すまじきとおもひて清ちやしくふぞ成よたつ示さしまを
清飾じておく一人へもあまれまじ・たんぐいしは迄て出る時は
二ふはこそいひけん・さるす西て合せしい作まるれか・いと
とおしきやよそでおけりよろかしこれ近江あまくさと切・六番に
よばれあまさと切れとなしべて二人へ切すへしねつし八方二ふへ来を

ふくろ・三河のくびとえあ得めて・夫婦の御前よ投のあるて
三人・金沸ゆれなしらせ給くびとさとて石塔ゆへ金を
らてやけんとこそれはめ・清服かまへてくらひえてき
せよし池つるよ捨そゆさへれてさきに清ふ安んとわれ
め・三河のくびと太刀の侍さんさしはくねさき海やまくひ清
服かれよおそうして御沸んすれか門とさして楞とぞやした
生谷たとしたまて鞍をよゝそとじうもおけりど見物の示は
そ・二人へおやしれは・口・太夫のかゞり八尺へ刀を竹ちつゝまを
びおゞりの・本中す数よるる力をゝふてらし内よへ沸んす
主がひとん当家の者ともうつ・方し義よ上りもかんかへ来
かのくとかけて・清経力二きてめ数すれかへか・あんて
弁くろしも省の・天井とかんあきて世尺の無常とさえく
りんじまうえ道無清しとよまんとて一字ともつのてよ来も
てどうんぐいくかよかゝらんすりん・当無あそく沸とひとを

ごくへ行たる所わろきものゝはゞや、おほかたのむじ稀にしてここで
やしなひてむかしもろが女がなげけりんとすなびんと思ひて後家
が命をたすけひろりやうぐて内へ入らんとしけるが
が弓矢とつものゝ立ゆかんとしてかれもいまんとす
とそくびをうち落しさげて門のうちへ出て門のかたへまゐる
の妻子ども下よりのぞきてこれをみてさては内よ
人やすきと泣おめきけれど内よりもあまし出家遁世して内よ
あけりとて年をとられたまひしと嘆きかなしみ
さぶらひさま事ともわらはゞおもひて入あまるとて
門にありきんとすることはわたくしもいはれぬ
しつもありしあいたはらのものとつれて
三つにさけて出家なりものゝよせのてきとりみわる
内よ入てよくみれば、ゆゑもなくすまをする
てこそ泣くなげきけるとてなんのいらくびをさぐりとて法

眼のひざの上よかけらまじれ、ひきさめそてむへ貴家
ては汁りにゆやひらんさぬ袖そて末ハ七尺よ
そ見えきる暁へてひとそ肉よ臭きび合せずしと雲
まおてまうるやと思合て先世まへとまこそ泣ひて山
へこそ出るかね名舞も行きれハ洞よ納とぬしの住眼
ひとめ泣よひまつかたさおなめえのひさでたまさ長ける
まえりすまむすて海のハ品あかんてさしまハ捨もげ
思へいやすまさりてやうるを色なれ本の成れハ思ひのね
やほのりえん袖のけみくしてひえさいのま見汁もそ
うしひ十六より渡よるけさ死よ哉そ情眼なりて抱そ
ひらりさい哉ら人世のそもわるをやむじつきる娘よ別れつ
とぬさうまる岳がんのすわせん方めえ袖もかさるへさ下
中たがひをまらねかまてたまた云子なのね秋さえひ入て
そ後梅そてびそとまえさ真人ハ情るべき浮世也

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府図書

国立公文書館
National Archives of Japan